

人たちの生活を支えているものを垣間見る
杉田 真衣（金沢大学）

1. はじめに

現代社会においてポピュラーなものとは何であり、それに根ざした「知性」とは何であるのかを探るとするのが、本報告に与えられた課題である。報告者はこれまで、高卒の若い女性たちを対象としたインタビュー調査や、野宿者たちに対する支援活動を行ってきた。こうした相対的には社会の周縁に置かれた人たちと関わっている経験から、なにがしかの知見を示すことが求められている。しかし私には、彼女ら彼らとの関わりを通して見えてきた「知性」を自信をもって示すことはできない。それは、そもそも彼女ら彼らがどのような思いで暮らしているのか、彼女ら彼らから社会がどのように見えているのかについて、十分に理解できているとは思えないからだ。そのような私が彼女ら彼らの言動の中に「知性」を見出すというのは、おこがましい気がする。そのことを前提にしつつ、彼女ら彼らが生きる世界に触れさせてもらえたように思えた場面を紹介していきたい。

2. 真空のような空間に置かれた経験

金沢で、野宿生活をする方たちに差し入れをしたりする夜回り活動を行ってきた。活動の中心にいるのは、あと数ヶ月で 70 歳になる坂優さんだ。元々野宿をしていた坂さんは、2008 年の冬に一人で夜回りを始めた岡山峰子さんから生活保護の申請を勧められたことをきっかけに、図書館で生活保護について調べ始めた。毎日通って関連する本を片っ端から読んでいき、分かったことを大学ノートに書き留めていって、制度について理解したうえで生活保護の申請に臨んだものの、受理されなかった。岡山さんに紹介された人の同行のもとで申請を通すことができると、岡山さんと協力して夜回り活動をする事となった。私が活動に加わったのはその 1 年くらい後になる。

坂さんは、私たちとの夜回りだけでなく、毎日一人であちらこちらに出かけ、元野宿者や現野宿者を支えている。野宿に至った理由は病気による失業で、いまでも身体が思うように動かなくてつらそうにしているが、それでも活動を休もうとはしない。そんな坂さんの姿を新聞やテレビで目にした人たちは心を動かされ、「仙人のようだ」などと評する。坂さんはよく私に対して「このあと二人だけでどこか行く？」といった性的なニュアンスを含む冗談を言い、「はいはい」と受け流すと「えへへ」と笑って、私も「ははは」と笑うというのが挨拶のようになっている。いかに事情通であるか、会の他のメンバーとよく張り合ったりもするので、メディアが坂さんの物語を美しく記述するたびに、「どうも違う」と違和感を覚えてきた。

しかし、かくいう私も坂さんのことをさほど知っているわけではないのだと思い知らされたことがある。坂さんに年 1 回、大学の授業でご自分のことを話してもらってきたのだが、来歴を話すなかで必ずと言っていいほど言葉に詰まり、涙するときがある。生活保護申請が通ってアパートに入居した直後のことについて話すときだ。アパ

ートの部屋で一人になると、「頭が真っ白」になったという。何をどうしたらよいのか全くわからなくなった坂さんの足は、自分が仲間たちとともに野宿をしていた場所へと向いていた。以後、仲間を支える活動へと没頭していく。坂さんが泣くのはこの話をするときしか目にすることがなく、坂さんの涙を初めて見たとき、彼を根本のところまで突き動かしているのがアパートでのこの経験なのだと知った気がした。

3. そばにいる人の怒りをともにする

2003年春に都内の二つの高校を卒業した方たちのことを、高卒5年目までは東京都立大学／首都大学東京の調査グループで（乾編 2013）、その後は単独で追跡し（杉田 2015）、インタビューを行ってきた。調査協力者のうち、庄山真紀さん（仮名）は、高校を出てから一貫して非正規で働いている。庄山さんは自分のことを「人見知り」と言うが、彼女の話には、同じ職場でパートで働く女性たちとの関係を築いていることがうかがえるエピソードが時々出てくる。たとえば、卒業後3年ほど働いていた弁当屋で、その店の正社員による理不尽な指示への怒りが抑えきれなくなって、仕事時間中に自宅に帰り、そのまま2週間ほど出勤できなかったことがあった。パートの女性たちが「大丈夫だから来な」と連絡をしてくれて復帰することができ、最終的には正社員二人と話し合うことになった。その話し合いで庄山さんは「パートさんに負担かけないでくれ」と言い、正社員のするような仕事をパート社員に押しつけるのはやめてほしいと訴えた（2006年4月22日インタビューより）。

高卒10年目に入る頃には、庄山さんはそのとき家賃を折半して一緒に暮らしていた男性との交際を終わらせるということがあった。彼が別の女性とのメールのやりとりにおいて、庄山さんのことを「居候」と呼んでいるのを目にしたからだ。庄山さんは高校のときからの友人である西澤菜穂子さん（仮名）にすぐに電話をして協力を要請し、数日ののちに別のアパートへと引っ越した。引越しの最中には気づかなかったが、西澤さんは元いた部屋の浴室にかつらを持ち込んでその髪を切り落とし、「(その上に)ケチャップかけてきてやった」と話していたそうだ。庄山さんの代わりに仕返しをしたというわけだ（2013年3月30日インタビューより）。

4. 日々行われる贈答

庄山さんの家族はホステスの仕事をする母親一人で、高卒4年目に母親が病死すると、家賃が払えなくなったため二人で暮らしていたアパートを引き払った。台所の流しの下のパイプがネズミに嚙られ、そこから漏れた水によって床に大きな穴が開くなど、部屋の状態は「相当酷かった」ので、多額の修理代がかかる見込みだった。しかし、敷金は戻らないものの、大家が事情を考慮してくれて、追加の修理代金は請求されなかった。大家の50代くらいだという娘は庄山さんに手紙をくれて、返事をしたら今度は食料を送ってくれたという。

「もらってばかりだと悪いんで、いちおうお歳暮とか、そういう形でお返ししたら、

たぶんまたあっちも気を遣ったんでしょうね、また来るから、こっちも気を遣うわけじゃないですか。返して、こう（互いに）返して返して返してみたいな。」（2008年2月26日）

このようにして、しばらく物を贈り合う関係が続いたという。庄山さんは私にも、インタビューのために会うとプレゼントをしてくれたり、手紙にプレゼントを同封して送ってくれたりする。先述の西澤さんもまた、インタビューの時に「バレンタインが近いんで」とか「いつもお世話になっているから」などと言って（世話になっているのはこちらの方なのだが）、きれいに包装されたお菓子を渡してくれる。

5. 生活の中の係留点

高卒の若い女性たちも、元・現ホームレスの方たちも、日々の生活をつくっていくことそれ自体が難しい状況に置かれている。しかし、彼女ら彼らは、生活することの難しさに翻弄されている日常のなかに、あるいは傍目からは上手い具合に立ち回っているように見える日常の奥に、他の人たちとともに在り、自分自身を見失わないための係留点のような経験や、それを生み出す技法を持っている。そこから彼女ら彼らの世界が立ち上がっているように見える。

上述のエピソードなどを踏まえて、当日の報告では、そのような係留点はどのような性格をもっているのか、そして、そもそも私たちはそうした係留点をどのように知ることができるのかについて考えたい。